

古  
代  
オ  
リ  
エ  
ン  
ト  
幻  
想  
創  
世  
記

# 四方世界の王

2  
あるいは50を占める長子

定  
金  
伸  
治

Illustration  
記伊孝

# 四方世界の王

古代オリエント幻想創世記

2 <sup>ハンシュ</sup>あるいは50を占める長子

SHUBAT-ENLIL

EUPHRATES

ASHUR

TIGRIS

● EKALLATUM

● ESHNUNNA

● DER

SIPPAR

BABILIM(BABYLON)

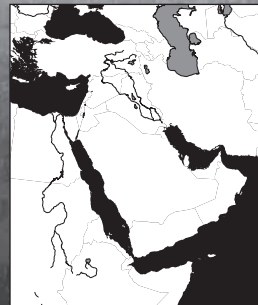
● NIPPUR

SUSA

URUK

● LARSA

● UR



MESOPOTAMIA IN THE AGE OF  
"SAR KIBRATIM ARBAIM"

Ancient Oriental Fantasy Genesis

# SAR KIBRATIM ARBAIM

## 2

Or, the primogeniture occupying 50

*Author*

*Shinji Sadakane*

*Illustration*

*Takashi Kii*

*Book & BOX Design*

*Takuzo Yamaguchi (GAROWA GRAPHICO)*

*Font Direction*

*Shinichi Konno (Toppan Printing Co.,Ltd)*

*Font*

*AKASHI / MATIS Caslon Open Face*

王者が、旧都ウルク郊外の丘に立っていた。

彼は制覇しつつある者であり、すでに四方は彼の手の内にあった。彼はいまや、制覇をなす者としての責務も果たさねばならないのだった。

広くブラスナ河の流れを望んでいる。

眼下には水路の張り巡らされた大地がひらけ、大麦が一面に穂を実らせている。

王は、農耕が適切に行われていることを確認しているのだ。

人が人としてはじめて成り立った時代より、王者には『国を守ること』と『農耕を維持すること』の二つが求められていた。シュメールの地を制覇した王者にとって、農地の視察は必ず為さねばならない務めなのだった。

「……豊かな地だ」

確かめるように王は言った。

かたわらに、女の姿がある。黒く澄んだ目をしている。くもった色合いの一切が混じっていないうつくしい瞳だ。それを王と同じ方角に向け、くちびるをまつすぐに結んでいる。

「正確に述べるなら、これまで常に豊かだった地であり、いまもお豊かであるところの地だ」

これから先も豊かであり続けるであろう地、という言葉だけが抜け落とされている。むろん、王はそれを故意に除いているのだ。つまりそこには、意味がある。豊かであり続けるかどうかはわからない、という意味が。そしてその裏には、豊かであり続けることはないだろう、という仄めかしが潜む。

そうしたもののすべてを、そばに控える女はすぐに感じ取るのだった。

「……それは」

女が口を開いた。

「推測ですか。それとも予言ですか」

短い問いかけだった。回りくどい表現を好まないようだった。

「いずれかである必要はない」

断言だったが、物言いは柔らかかった。言葉の流れがゆるやかで、女への慈しみが表れている。すなわち女は、王の後だった。

「わたしは、ただそれがそこにあるものとして述べている」

王のこたえには、飾ったところが一切なかった。事実をそのままに話している声だった。

「……それは、あなたが神そのものと一致しているから」

遠くを見たまま話す女の口ぶりは、どこか寂しげでもあった。

「人には、そこにあるものをそのままに捉えることなどできないのです」

「……問おう。わたしはいまや人ではありえないのか」

「そのように思います」

女は冷え冷えとした硬い物言いでも返答した。あたたかみのある王の声とは正反対だった。ただ、それは生来の特徴であって、裡には王と同じ慈しみがあるのは明らかだった。瞳のゆらぎが、すべてを示している。

「言葉なり祭祀なり、そうした記号に置き換えなければ、人は『そこに在るもの』を理解できないようにできています。しかし、あなたの仰りようの一人は、まったくそのようではない……」

王は何も言わなかった。ただ己の責務が彼の裡を大きく占めているようだった。人への情愛は、彼にとって責務の後へと回さねばならないものなのだろう。

「あなたはすでに神としての限定符を付与されています」

女はたしなめるように言った。

「四方世界を入手したときに、あなたは神と一致したのです。だから、あなたの世界の捉えようは、かならず人とは異なっている」

「……そうだな。その通りだ」

すべて受け入れて、王は静かに答えるのだ。

「人はそこにあるものをそのままに捉えることはできない、か……」

反芻するようにして王は、女の言葉を心に確かめていた。それは后への情愛があらわれた姿だったが、しかし同時に、ひたすらすべての物事を己の裡へと深く沈着させようとしているもののようにもあった。

「よく憶えておこう」

女の瞳にある哀しい色合いが濃さを増した。それは王を思うゆえの色だった。が、彼女はそれをなるべく外に見せないようにしているようでもあった。

目をそらすようにして、女は話を戻した。

「……豊かさのうしなわれるときは、いつ訪れるのですか」

「いつ、というような破滅であってはならない」

王は遠方を指さした。

その先には、白い大地が広がっている。冬の日差しを真つ白に反射する烈しい光が、見る者の目を焼く。しかしかつてそこは、やはり同じく麦を育む畑地であったのだ。農地を取り囲む白い大地、すなわちそれは放棄された畑だった。

白は、塩の白なのだ。

「破滅ではなく、衰亡でなければならぬのだ」

純白の大地を遠望しながら、王は静かに語る。

「イディギナの大洪水のごとくすべてが一举にうしなわれれば、人のあらゆる積み重ねも同時に消えゆくことになる。人はまた獣の有りようからやり直さねばならなくなるだろう」

廃畑の表面に厚く吹き出した塩。もはや、その地に植物が実をなすことはない。時が塩の蓄積をもたらし、ついに人はそれに対抗できなかつたのだ。

「この農地では、いまや大麦しか育てることができない」

「……塩に弱い麦は、もう育たないのですね」

「しかし数百年前は、ここで小麦も作られていたのだ」

「むかしは、いまよりもなお豊かだったと」

「そうだ。記録を換算すれば、いまの倍近い生産量があったことがわかる。四方のあらゆる地は衰えている……。しかし誰もまだそれに気づいていない。衰えの速度がきわめて緩やかだからだ」

らだ」

「はるかなむかしから、この地は衰えつつあったのでしょうか」

「歴代の王が、それを塞ぎ止めてきたと言っている」

塩の害を防ぐ様々な手立ては、数千年のむかしから絶えず続けられてきた。休耕。灌漑。それらは、王による指導がなければなされえない事業だった。古くからすべての王は、王としての責務を果たしてこの地を維持してきたのだ。

しかしそれでも。

自然による千年単位の蓄積は、人のあらゆる努力を覆い隠してゆく。

人に悟られないよう、きわめてゆっくりと。

「歴代の王は、この地を緩やかに衰えさせてきた。それはまさしく、偉大な行いなのだ」

王はなお、塩の大地を見つめている。衰えの根源がそこにあるもののように。

「緩やかに衰亡してゆく。それならばよい。人は文字も知識も保ったまま世界の外へと足を踏み出し、新たな四方を築くことができるだろう。わずかな後退はあっても、すべてが消失して無に帰することはないはずだ」

「ならばあなたも、歴代の王と同じ務めを果たさねばならないのですね」

「そうだ。しかし……」

王は悩んでいる。己の裡にあらゆる神を習合してなお、悩まねばならないことはとめどもなく降り積もつてゆく。

「もはや、かつての王と同じようであることはできない」

「同じようであつては、同じ務めは果たせない、と？」

王は頷く。

視線の先にあるのは、白い大地の所々にある池だった。灌漑用の水路を引き込んで作られた人工の池だ。

「……ふとどきな」

女は吐き捨てるように言った。大人しく整った顔立ちからは想像できないような烈しさをふくんだ言葉だった。薄汚れたものに対して、生理的に何か許せないものを感じる質らしかった。そこにはむしろ男性的な手荒さがあった。

「塩で儲け……耕すことを忘れては、衰えはさらに加速する」

「そうだ。そしてそれは、衰亡を破滅へと変化させるだろう。急速な衰えは奪い合いを増進し、奪い合いは戦火となつて大地を焼く……。四方は、一挙の破滅へと向かうことになる」

池は、周辺の農夫が勝手に水を引き込んで作ったものだ。

塩を溶かし、精製して売るためだった。塩で儲けることを覚えた農夫は、耕すことを放棄す

る。やがて荒れた農地が広がり、表面には塩が吹き出し、純白の大地はさらに広がってゆくことになるのだ。

罪として罰されねばならない行いだつた。

「しかし、心情的には彼らの行動を責めることはできない。知識を得たならば、利用する。それは人の本性というものだからだ」

「そして、それを責めるのは神の役割だから、とでも？」

「そうだ。……いや、そうだった。いままでは」

「これからは違う、と？」

「……そうだ」

王は覚悟を決めたもののように言った。

ただでさえ、この地は食料が豊かで、農夫の労働意欲は高くない。懸命に汗水を流さなくても、十分に食べていけるからだ。それを戒めるのは神の役割であり、歴代の王は神の怒りを巧みに利用して世界の衰えに対抗してきた。

しかしもはや。

伝統として受け継がれてきた手法は通用しない時代になっていた。

神への畏れは、知識によって乗り越えられつつあるのだ。

白い大地にある人工池は、それを象徴している。塩を売って対価を得るといふ知識に対して、神の制裁は機能していない。人々は、そうした事実を感覚的に理解しつつある。

王は語る。

「現在」というものは、あらゆる蓄積が最大に達した極限の一点のことだ」

王は目を閉じた。ありうる行く末のすべてが、彼には見える。そのことが、彼にとっての哀しみであるのに違いなかった。人の人たる有りようが、衰えを加速させる。それは、一挙に滅亡する結末へと強固に繋がっている。

「……人の知識も、同じく蓄積されて……」

「そしていまや、神というものの容量をも超え、世界へと溢れ出てしまったのだろう」

争い。怠惰。政治的空白。そうした要因による破滅は、人が人であるがゆえに生じるものであり、なおかつ人が人であるために必要な要素の一切を失わせるものでもあった。

そうした人の有りようを、王は心情では理解している。また、慈しみもしているだろう。しかし彼は、務めとして弾圧せねばならないのだった。人が生まれながらにして余儀なく持っているものの多くを。

「おそらく、王というものの有りようの画期が来ているのだろう」

かつて神が果たした役割を、みずからが為さねばならない。その手段として彼は四方世界を

統べ、神と一致したのだ。

「これからは、言葉が人の動きを制限するのだ」

王は破滅を身に背負う覚悟を持っている。そして、そうした思いの一切を女はやはりすぐに感じ取ってしまうのだった。

「あなたが画期となることは、わたしにはわかっています」

女の冷え冷えとした声は変わっていない。しかし、裡にあるものは明らかに違っている。女はそれをそのまま言葉として王の前につむいだ。

「しかし、わたしには不安なのです」

「世界の行く末が」

「……いえ」

怒ったように女は言った。本当に、心底から怒った声だった。しかしそれは、相手を心配するがゆえの怒りであり不安なのだ。

「あなたが、神としてすべてを背負おうとしているのではないかと」

王は微笑んだ。しかし、何も答えなかった。偽りを話すことはできない。しかし後の不安を思えば真実も話すことはできない。それゆえに、彼は沈黙するのだろう。

王の肩に、今ふと現れたもののように、白い音呼が立ち現れた。美しい鳥だ。羽毛は太陽の

光を浴びて、薄く金色に輝いている。

常に王のそばにいる鳥だった。

実際に、この音呼は『常に』王のそばにいるのだ。

つまり『今』現れたのではない。

女がこのときに認識したために冥界ケルネキの泡の裡から女の意識へと立ち現れたのであって、いずこからか飛んできたのではないのだ。それに、この音呼は片方の翼がなかった。鳥でありながら、もはや飛び立つことはできないのだ。

「……後の不安は正しいか？」

音呼を手のひらに乗せ、王が戯れたむむとして問いかける。

王に答えるように、音呼は左の翼を大きく羽ばたかせた。

「……そうか」

なんらかの徴を感じ取ったように、王は一人で納得した。鳥の飛翔ひしょうの動きには、兆きざしが宿る。彼はそれを見ているのに違いなかった。その内容がなんであるのか。幸福なのか。それとも自らの滅びなのか。しかしそれは、后にもうかがい知ることのできないものだった。

王は、やはりただ沈黙するのだ。

「鳥は嫌いです」

女は、言い募もつる声で話した。

嫉妬しとの色をふくんだ言葉だった。

この音呼は、彼女が王と出会うずっと以前から、王の言葉に触れてきた。

王が王であることを受け入れたときに、この鳥は彼のそばに現れた、と彼女は聞いている。そして彼女が聞いたことは、そのみでもあった。

「……嫌いです」

常にそばにいる鳥。

独り言も、弱音も、すべてこの鳥は聞いてきたのに違いなかった。

王の言葉のすべてに触れることができた唯一のもの……。それが、この鳥だった。しかしそれは正しいことではない。王のすべてに触れうるのは、その後であるべき……。嫉妬の混じる女の苛立ちも、そうした信じ込みに根源を置いていた。

「そうだったか」

王の目に、どこか微笑ましいものを見ているような色彩が浮かんだ。それは幽かすかな動きだったが、后として連れ添う女にとってはまったく明瞭なものでもあった。

ただ、女の態度から硬さはなお消えない。

「……そうです」

同時に、音呼の形は女の意識の裡から消えた。冥界を通じて、時の方向へと薄く拡散したのだ。客観的には、幻のごとくその場からたちどころに消え去った。

「羽をむしった肌など、ぼつぼつしておぞげだちます」

女は、そのようにだけ言った。

あえて、いつものままの冷え冷えと孤絶した口調で。

**※続きは単行本2巻でお楽しみください!!**